

ト・ピ・コ・ト



高見十三さん
(生活情報)

穴生学舎を紹介する時、「上は90歳から…」と枕詞並に語られるのが高見十三さん。学舎歴は今年度で十七年になる。

何しろ、オートマ車が珍しかった三十年前、周囲の反対を押し切って、64歳で運転免許証を取得。以来、ドライブ三昧の日々を楽しんだ。

ふれあい広場

天草五橋の旅

川村キヨ子(文化伝承)

これまで、熊本県の三角港までは何度か来たことがある。それから先へ行った記憶がない。だから、五橋全部を渡るのは初めてだ。

まず、三角西港から天文橋を渡って大矢野島へ。島ならではのにおらかさを感じる。ガイドの天草四郎の説明に耳を傾けつつ、キリシタン文化を守り抜いた人々の苦勞に思いを馳せる。

当学舎を志願したのが74歳。動機は「人とのふれあいを求めて」だった。しかし、当初は研修費が無料だったこともあり、志願者が多く、希望したコースに入れなかった。それでもやる気をなくすことはなかった。

九十歳の研修生 衰えない好奇心

お得意は皿回しや手品、南京玉すだれに銭太鼓と多彩。若い頃からの好奇心は衰え知らず、その行動力には定評があり、病院訪問などボランティア活動にも積極的に参加している。

穴生学舎に対する注文は特にないが、「コースの曜日変更」が唯一の望みだとか。

私たち修学旅行の一行は、大矢野島橋・中の橋・前島橋を通り、松島橋を過ぎて、今宵の宿に到着。さまざまな島が浮かぶ景色は、ここが日本三大松島の一つに数えられるのも、さてこそと思わせるものがあつた

ホテルでは汗を流してさっぱりとしたところで、恒例の大宴会。コースの仲間の中司人美さんが剣舞「天草洋に泊す」を舞った。これは頼山陽が天草の風景を詠んだ漢詩に振り付けしたものでその時宜を得た演目の選択と熱演に見惚れた。

一夜明けるとまたバスの中。目の保養、心の癒し十分に楽しんだ二日間だった。

来年度のコーラスコースは、募集しないことが決まった。ちよつと、開設二十年目の節目にあたることから、これまでの歩みを駆け足でたどってみた。

コーラスコースは平成6年9月の当学舎開校と同時に開設された。平成9年、第4期生が入学してくると、「百人で歌いたい」と小笠原包道先生が「つばさ」の設立を思い立つほど、修了者も増えた。小笠原先生は開設以来、講師を務めている。

「入学時点で翌春のコンサート要員に組み込まれていた」とは、ある4期生の述懐。こうして平成10年3月、93名の団員を擁する「つばさ」の第一回演奏会が、小笠原先生の指揮により響ホール(八幡東区尾倉)で開かれた。第二回目から指揮者が双紙先生に交代したが、以来昨年まで、年一回の定期演奏会を開いて16回。さらにこの間、18回に及び各種イベントへも参加してきた。

入江初恵 地域ふれあい

さ庭辺の新緑に映え 白き花
風にさ揺られ山法師 咲く

今日もまた遺影に向かい語りかく
懐かしき日々 亡夫しのびて

亡夫恋う 甘えた胸今はなく
過ぎし想い出懐かしむ我

コーラスコース 20年の歩み

課題の練習場

結成当初からの課題は練習場の確保。練習会場を求めて、あちこち彷徨った。

こうした厳しい環境ではあつたが、8期生の頃には午前も午後も練習といつた過酷な日々。そのころには実業団など、名のある合唱団からも一目置かれる存在に成長していた。

冷房が完備されていない練習場では夏は大敵。酸欠に近い状態に陥ることもあり、携帯酸素ボンベ持参の団員やハンカチに氷を包んで持参する女性団員もいた。

復活望む声も

20年間親しまれてきたコーラスコースだが、来年度は募集がストップする。事情さえ許せば、コースの復活を望む声は大きい。



校歌斉唱 in スポーツ大会